人体計測データベース構築（第4報）

-生活動向・嗜好調査アンケートについて

○加藤まや，杉山康夫，生澤佳弘，高橋真佐美，栗山洋四
（人間生活工学研究センター）

Towards the Construction of a Database for Human Body Shape (4)

Maya Kato, Yasuo Sugiyama, Yasuhiro Ikuzawa, Masami Takahashi,
& Hiroshi Kuriyama
(Research Institute of Human Engineering for Quality Life)

1.はじめに

人体計測キャラバンに付随して生活動向・嗜好についてアンケート調査を実施している。これは、(社)人間生活工学研究センターにおける人間関連データベースの構築計画の第二，第三段階の予備調査と位置付けられる。ここでは実施中の調査の内容と将来に向けての展望について述べる。

2.調査の内容

生活動向・嗜好に関するデータといっても、その切り口や捉え方によって調査のレベルはさまざまである。今回のアンケート調査は、多角的にデータを収集することとしたので、調査票の種類は多岐にわたるものとなった。それにより、今後実際にデータベース構築を目的とした調査を実施する上での問題点が抽出されるのではないかとというのが狙いである。

以下は、アンケートの種類とその目的である。

1) 感覚・運動機能

視聴覚をはじめ、五感や運動機能の加齢にともなう変化の自覚の程度をおさえ、高齢化社会に向けてお年寄りにもやさしい製品や環境づくりに役立てる。

2) においの好み

40種類以上のにおいを表わす言葉から喚起される快不快度を調査することにより、においそのものの快適さの判定に役立てる。

3) 製品の使い勝手

駅の自動券売機をはじめワープロやビデオなど、使い勝手が問題となっている5種類の製品についてその使いにくさはどういう点にあるのか明らかにし、今後の製品開発に役立てる。

4,5,6) 文化的事柄・衣食・住生活に関するライフスタイル

日本人の平均的なライフスタイル像について、特に伝統的な生活様式に対する嗜好がどのように変化してきているか、文化的側面、衣食生活、住生活といった切り口から把握する。

3.実施方法

調査対象は義務教育終了年齢以上の人体計測の被験者である。アンケート調査対象者総数は終了時点で約3万人となる見込みである。調査票は6種類であったので、1調査票あたりの対象者数は5千人程度となる。

実施方法は人体計測の受付時に被験者にその場で記入を依頼し回収するため、1人につき1種類の調査票とした。調査票の種類はキャラバン実施地域内による偏りがないように考慮し、配布している。

なお、計測現場での手続き上の制約等もあり、本調査の内容は人体形態とはリンクされていない。被験者に関する個人的情報もプライバシーの問題があり、居住都道府

県，年齢，性別のみをおさえるだけとしている。

4.解析方法

6種類の調査票に共通して，居住都道府県，年齢（10歳階級），性別による単純集計を行う。さらに，それぞれの調査票の主旨に従い解析を行う。具体的には以下のとおりを検討中である。

1) 感覚・運動機能

加齢による変化について年齢階層*感覚器官・運動機能別のクロス集計を行う。

2) においの好み

種々のにおいの好みについて属性による差をみるクラスター分析を行う。

3) 製品の使い勝手

属性*使用上の問題点のクロス集計を行う。

4,5,6) 文化的事柄・衣食・住生活に関するライフスタイル

それぞれ属性別の生活嗜好をクロス集計し，類型化を試みる。

調査が現在進行中なので，具体的な解析結果については口頭で紹介するにとどめる。

5.データの活用

調査結果の利用法は，以下のとおりを計画している。

- ・高齢化社会対策として現在計画中の「高齢化社会生活工学データベース(仮称)」へ高次展開する。
- ・人にやさしい製品の開発や，快適な環境を創造するための空間設計に活用する。
- ・今後の調査対象者の属性分類の参考とする。

6.将来へ向けての展望

今回の調査では，データそのものの解析と活用ということのほかに，データベース化に耐えうるデータを得る調査方法を検討し今後得られる情報をいかにデータベース

化するか考慮することが重要なポイントである。

人体形状のデータとは異なり，社会調査的性格も持つ本調査のようなデータを役立つ形でデータベースへ格納するのは容易なことではない。生データへのアクセスが可能であることは必至であるし，わかりやすい情報提供といった観点からは，解析された結果をデータベース化することも要求される。また，調査はある程度モデル化され，仮説検証的に行われるが，その時点での調査方法の信頼性・妥当性が大きく問われる。場合によっては文献ごとのデータベース化も必要かもしれない。

さらに今後すべきことは，ニーズ調査でどういったデータについての要望があるか，また，望まれるデータ提供の形はどのようなものであるかを明らかにしていくことであろう。

7.まとめ

人体計測キャラバンに付随して，生活動向や生活嗜好に関する調査を行っているが，得られた知識をデータベース化する上でいくつかの問題点が抽出されている。まず第一にデータの処理のレベルである。第二に調査の信頼性・妥当性を高めること，第三にはデータ提供の方法である。これらの点を考慮して今後の調査および人間関連データベースの設計・構築へとつなげて行きたいと思う。

<謝辞>

調査票立案にご協力いただきました，増山英太郎（東京都立大），堀田明博，斉藤幸子（生命工学技術研），岡野美佐子，政岡進（通産検査所）大澄義正（トヨタ），緒方忠雄（大林組），山口修二（三洋電機），後藤義明（積水ハウス）の各氏に深く感謝いたします。